ディアコニア

288

説教

「清くなれ」

（マタイ8：1～5）

―全的医し（ホリスティック・ヒーリング）―

鈴木和男
日本キリスト教団　引退教師

「ここで亡くなっていかれる方々は、最期に、何を言い残されるのでしょうか」

と恐る恐る発した問いに返ってきた答えは、「みな、家に帰りたいというのです」というのであったことを改めて痛切な思いで想起する。

かつて、「ライ者」と呼ばれ、家族からも親族からも友人・知人たちからも、村や町からも追放・隔離されて、一生を「国立療養所」という名の強制収容所ですごし、そこから出ることを許されなかった人々からの返事であった。

明治40年に制定された「癩予防法」が撤廃されたのは平成8年（1996年）。百年もつづいたこの悪法がなくなったのちも、ほとんどの人々が故郷へ、わが家へ帰れなかった現実。「重い皮膚病」（共同訳聖書訳）などと名は変っても変らないこの病への偏見、加えての隔離、差別、疎外の現実は変らなかった、いまも変らない悲しみ。

「国立療養所（青森）松丘保養園」は全国13ヶ所につくられた療養所の本州最北のものだが、そこで、いま、人生の最期の時を生きている人のひとりに、神子沢新八郎氏がいる。非礼をあえてお名前を記すが。勿論、この名は本名ではないのであろう。親族や同族に迷惑をかけまいと変名して自らを消した名であったのであろう。

少年の日、「ライ者」と診断され療養所に入れられ、戦後「プロミン」の発見によりいち早く病は完治したのに、ついに故郷へも家にも帰りえなかった。

「癩予防法」が撤廃された後、思い切って生家を訪ねるが、生家の見える道の角を曲がりきれず、身をひるがえして療養所へ戻ってきた日のことを話してくれたことがあった。その無念はいかばかりのことであったか胸が痛む。

夫人と二人、久しきにわたり、療養所内のキリスト者の群れ「聖生会」の世話をつづけてこられた。その仲間も残ったものはほんの数名と聞く。「神子沢」という名も、自分も「神の子」のひとりとの切願と自負があったのであろう。主・キリストにあって「新」しく生まれたものとの信仰の告白もこめられていたか。

「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った人は、主・イエスが「手を差し伸べてその人に触れ」「よろしい、清くなれ」と言われると、たちまち「清くなった」と福音書は記しているが、そのあと、「だれにも話さないよう気をつける」ように厳に戒められ、「ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明する」よう求められたという條りがつづく。

この人は、こうして、本当に「家」に帰りえたのであろうか。「祭司」の証明は効力を持ちえたのであろうか。むしろ、

かつて「ライ者」であったことの証明となってしまったのではないか。帰った家では拒否され、友人たちも歓迎はしてくれなかったのではないか。それがこの人を待っていた現実ではなかったか。福音書は何もその後のことについて伝えてくれていないように見える。

「ヨハネによる福音書」第8章の伝える〝姦淫〟の現場で捕えられ、リンチにかけられ、不思議な主・イエスの一言によって男たちの告発はしりぞけられ、男たちは立ち去っていったが、「わたしも、あなたを罪しない、行きなさい」といわれたことばを信じて帰っていったこの女を待っていたのは、主・イエスは「赦し」てくれても、一向に、絶対に「赦」そうとはしない〝世間〟の現実ではなかったであろうか。

主・イエスが、人間社会の不寛容、世間というものの持つ酷薄さをご存知なかった筈はない。たんなる「同情」などではない主・イエスの「深い憐れみ」（マルコ1：41）は、病める者の病いを「医し」うる力を十分に発揮したもうたことであろう。福音書の記録する数々の「医し」の奇蹟物語りはそのことを示しているであろう。

その主・イエスに、さらに、人間社会の不寛容・世間のもつ酷薄さを打ち砕く力がなかった筈はない。病める人々を医された主・イエスの行動は、人間に人間を医しうる力が与えられていることの証左でもあった（マタイ9：8）のであり、「人が、人を救うことなど出来ない」と尻ごみするわれわれの不信と怠慢への警告でもあったのであろう。

ひとりの人が医されるときには、社会全体も医されるのでなければ虚しいことになろう。病める存在は病める社会の反映なのではなかろうか。「医し」ということは、その社会全体も同時に「医される」、つまり、あの「世界の酷薄」というものから解放されるものでなくてはならないのではないか。「全的医し（ホーリスティック・ヒーリング）」ということが提唱されていると聞くが、正にわれわれの進むべき道が、そこに示されているのではないか。

「どこへも行くところのなくなった人を受け入れ、もうどこへも行かなくてよいと安住の家をつくりたい」というのが「かにた婦人の村」創設の深津文雄牧師の夢、また祈りであり、それは、主・イエスを取り戻しに現れた母・マリヤや兄弟たちに主・イエスが言い放たれた断言―「わたしの母、わたしの兄弟とは誰れのことか」、周りに座っている人々を見廻して「見よ、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる（マルコ2：31～）」―への応答の姿であったか。ほんとうの「家」への挑戦でもあったのであろう。

松丘聖生会のひとりの洩らされた一言が心に残る、「ここからでも、天国へいけますから」と。「時は満ちた、神の国は到来した」との主・イエスのことばは、正に、この世界全体の「全的医し」の宣言だったのではなかろうか。「救いは今日この家にきた」（ルカ19：9）と。

（前・田浦、長野県町、鎌倉、青森教会牧師）

ディアコニアの原点⑤

エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ？

――マルコ15：34

もっとも古い福音書マルコおよびマタイによると、われらの主イエスは十字架のうえから唯一言おおごえに叫びたもうただけである。それ以外のオシャベリは一切されなかった。朝から、彼はただオシだまっていた。人々が怪しむまでに……。

総督ピラトのまえに曳きたてられて「お前はユダヤの王か？」と問われたとき、「はい、さようでございます」と頭をさげたきり、あとは何もいわなかった。侮蔑か、断念か、放心か、疲労か、憤怒か、寛容か、彼はさらに何事をも答えなかったのである。

そして、磔付け柱のうえに苦しむこと6時間、おおごえに「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ？」と叫んで絶命した。

その意味はアラム語で、わが神、わが神、なんぞ我をすてたまいし――ということである。黒雲におおわれ雷鳴さえひびく空のした、まことに凄惨きわまりない情景であった。

わが神、なんぞ我をすてたまいし――という叫びは、説明のしようもなく暗い言葉である。なぜそのような破れはてた心で、ガリラヤの予言者は世をおわらねばならなかったのか？

病気のときに見舞い

たとえ人間には一人のこらず捨てられても、天の父なる神のみは見捨てたまわないというのこそ、彼の所信ではなかったのか？かくのごときブザマな死にかたをするものに、ふかい心のよりどころを見出しうるものであろうか――人は動揺する。東洋人のとおといとする大往生の理念とあまりにも対照的だからである。

ある神学者は説明していう――これは神の独子が万民の罪のあがないとして死する。その死であるがゆえに、かくも暗いのである。彼は万民の罪をおのが罪として負うたのである。それゆえの暗さ、それゆえの苦悩である――と。いかにもそうであろう。

ある聖書学者は説明していう――この言葉はそのまま詩篇第22篇の初行である。イエスは幼少より教えられてよく旧約の章句を暗誦した。ゆえに人生の諸体験にあたって、それらの章句がよみがえってきて大きな力となった。ここでイエスは詩篇第22篇を想起し、それを口ずさんだのである。この詩篇は最初は神にたいする疑念からはじまっているが、終りには大きな信頼となるのであって、イエスもまた心のなかにこれを誦んじて大安心のうちに世をさられたのである――と。あるいは然らん。

ある心理学者は説明していう――イェ

スもまた肉体をまとった人間であった。そして苦患の極みにおいては精神がおとろえ、口に神をうらむようなことを言ったかもしれない。しかしそれは一時の曇りであって、やがて晴れわたる神への依頼のうちに世をさったに違いない――と。そういうことも言えなくはなかろう。

しかし、私は、それらの説明をきいて楽しまない。なんとなれば、それらの説明は、彼がまことに捨てられたもうたということを和らげようとするからである。私はいいたい――神の独子の苦患の内奥にたちいって、私はそれを理解する術をしらない。しかし、このことだけはマトモから受取りたい〈彼は真に捨てられたのである。捨てられる真似をしたのではない〉と。

この〈捨てられる〉ということが完かかったゆえにこそ、〈拾われる〉ということが起りえたのである。捨てられもせず、拾われもしないものに、何の救いがありえようか？

捨てられたことにしておく――拾われたことにしておく――これが、あまりにも多すぎる。

奉仕女の訓練はなるほど素晴らしいものである。その精神で普通のお嬢さんがたも働いたら、どんなに好いだろう？ゼヒその様式をまねてみたい――とは、よく耳にする言葉である。

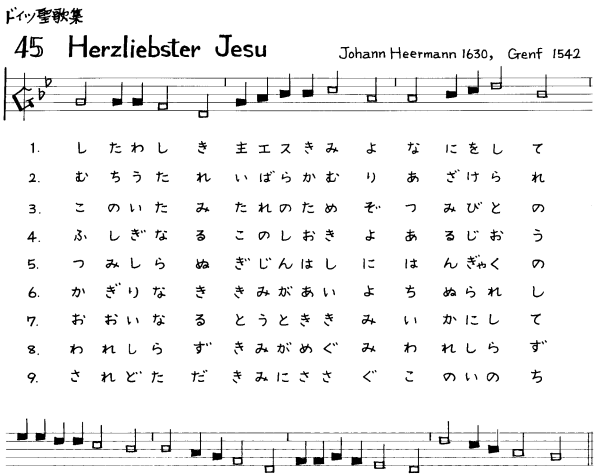
しかし私は心のなかで言いかえしている――奉仕女は一切を捨てたから、あれだけの力をいただけるのである。給料もほしい、お嫁にも行きたい、人並みのおしゃれもしたい、そして奉仕女の精神ももちたいといっても、そうはゆくまい――と。

「我等もし彼と共に死にたる者ならば彼と共に行くべし。もし耐え忍ばば、彼と共に王となるべし」（テモテ後書2：11）

（深津　文雄）

「ディアコニ」6号

受難週に歌うコラール　したわしき 主エスきみよ



共に座す喜び

小倉　和三郎

操姉は還暦を迎える年代に至って、これからの自分に出来る奉仕は何か模索し始め、地域の老人（女性）を支援する働きに的を絞り、具体的な準備を始めた。学園町と新座に住む高齢の女性を訪問し家庭奉仕員の役目を担ったり、電話による話し合いを引き受けたりしたそうである。やがて知り合いになった女性たちを教会の礼拝に誘ったり、教会が提供してくれた一室を使ってお茶会を開いて語り合い、その発展として、週1回の「つくし会」が開かれるようになった。

私は2002年にベテル教会に赴任して以来6年間、つくし会の参加者に聖書のお話をするため同席した。当時は、小林たみ子さん、中村義子さん、山本百合子さん、中西信さんらが中心で、人形や手まりを作り、讃美歌を歌い、茶菓を戴きながらのおしゃべりを楽しんでおられた。また手作りの作品は主にいずみ寮のバザーに出品されていた。操姉は終始笑顔でその団欒の輪に加わっていた。その情景から私は次の詩篇の1節を連想する。

「見よ、兄弟が共に座っている。
なんという恵み、なんという喜び」
（新共同訳詩篇133：1）

兄弟とは信仰と生き方を共有するともがきの群れの平和で暖かい団欒の幸いを歌っている。私は、つくし会の交わりは、この詩篇が描いている、教会を家とする、共に生き共に座す幸せを反映していると思った次第である。そしてそれを可能にしているのが、参加者と共に座しているシュヴェスター操だった。

ヨハネ福音書第19章25節以下に、十字架にかけられて、正に断末魔のキリストが、御許に立ち尽くす母マリアと主の弟子ヨハネを交互に見下ろしながら語りかけた遺言が記されている。主は、母マリアに「この弟子は、あなたの子です」と告げ、弟子に向かって「見なさい。あなたの母です」とお告げになった。これは正に主の遺言だった。主は弟子と母に戒めや宣教の使命を告げるのではなく、ただ、これからはキリストを信じる家族として共に生きるように促したことが重要であり、先に引用した詩篇133編の祝福された交わりと呼応しており、教会のあるべき交わりとベテスダ母の家の使命にも通じる主の御言葉である。

操姉は生前、教会に保管された文書に御自身の愛唱聖句として、ヘブライ人への手紙12：1～13を挙げておられる。

「わたしたちはおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」

操姉はその生涯の途上でキリストに出会い、キリストの僕として、この聖句を体現すべく、課せられた使命のために忍耐強く走り抜いた。そして今、私たちは操姉がそのゴールである御国の競技場にたどりつき信仰の先達たち…先輩のシュヴェスターたちや深津文雄牧師、藤巻三郎牧師たちに迎えられていると信じることができる。

（元大泉ベテル教会牧師）

小さき群れの中から
姉妹また一人逝く

天羽道子

わたし達の小さな群れから、また一人、山下操姉が全く突然に、89歳11ヶ月の生涯を閉じて天父の御許に召されました。

3年余り前から介護いただいていたホームで、2月14日夜の短時間に起きた変化。虚血性心不全で、苦しみもなく安らかに永遠の眠りにつかれました。

ミサオ姉は、1955年に第2期志願者として入館。当時母の家は、埼玉県加須市にある施設「愛の泉」の中に仮住まい中。愛泉教会で行われた第2回着衣式を経てベテスダ奉仕女母の家の一員になられました。1年間の基礎訓練を終えて先ず遣わされたのは、愛泉乳児園の補助と、教会関係者のお宅での病人介護。

58年に母の家が板橋区茂呂に移ってからは茂呂塾保育園の事務を。この間半年は母上の看病に当たられ、60年からいずみ寮5年、かにた婦人の村の創設期の4年間を担われ、母の家に戻って新入館者の指導を4年間。その後1年間を、次のステップへの備えの時とされました。

「73年度1年間は研修という形でお休みをいただき、前半の6ケ月は心身の休養に用いさせていただきました。現場を離れて休むという、そのはじめてのことには只茫然としていましたが、やがて何か始めなければと思いました。――そのようなある日、新聞記事を通して知った職業訓練校へ行ってみようと思い立ち、老人看護も学びました。」（D誌130号）

姉妹は、職業訓練校の福祉ヘルパー科で半年学んだ後、大泉ベテル教会の総会で、「地域にいるであろう老人訪問の仕事をさせてもらえないだろうか」と願い出ています。この熱心な願いは、教会の地域活動のひとつとして受け入れられ、予算化もされて、74年4月から活動が始められました。

その働きの一端を、祈りの友のお一人がディアコニア誌に書かれています。

「――1977年、シュベスター操の行動は、教会和室で、墓参同行、自宅へ、医院へ同行などなど、とてもきめの細かいもので、主婦である私にはとても真似のできない内容でした。S姉が入院されたため病院との往復などでほとんど毎日。S姉が意識をなくされ、シュベスター操は附き添うため病院に泊っておられます。」S姉はミサオ姉の一晩の附き添いの翌日夕方に召されました。

奉仕女として62年。その後半の30数年を、大泉ベテル教会に増築していただいた和室で、週一回の高齢者の集い「つくし会」を立ち上げ、その志を生かしていただけたことは、ミサオ姉にとり、どれほど幸せなことだったでしょう。

「振り返ってみた時、その時々に神と人との支えによって生かされて来たことを思わされ、心から感謝しております」

（D誌266号「支えられた日々」より）

施設だより

かにた農園の仕事

武田　敏尚

かにた農園は、村人14名と職員4名（30歳から77歳）で組織されています。畑、果樹、水田、ハーブ園からなり、畑では葉物類、豆類、根菜、椎茸といった野菜を、果樹は甘夏、温州みかん、キウイ、カボス、びわ、雑柑を栽培しています。いずれも無農薬です。収穫物はほぼ毎日、調理場を通して食卓に並びます。自分で作れるものは自給するという創設時の理念の下、毎日少しずつ各人ができる仕事を進めています。具体的には、畑作り、種まき、苗作り、草とり、草刈り、肥料撒き、鳥害対策、枝払い、収穫物の選別・洗浄、片付け、機械のメンテなどです。

毎日の仕事内容を見ていきましょう。朝食後まずは農園への出勤です。山の中腹にある農園基地まで急な坂道を歩いて登ります。集合したら野菜と果実の収穫に分かれます。収穫物を選別・洗浄し、整理して調理場に運びます。それが終わると畑の草とりや果樹園のこさ払いです。11時からはお茶になります。お茶の時間には、日々変化する農園の出来事や昼食のメニューのこと、行事のこと、体調のことなどを話します。当番がコップを洗ったら午前中は終了。昼食とつかの間の昼休みとなります。

午後は種まき、苗つくり、草とり、枝払いなどをします。最後に調理場から排出される残飯を回収して山の中の籾殻コンポストに入れて肥料化します。月に一回廃油から粉石鹸を作ります。これらも自給自足の一環です。

収穫までには障害もあります。カラスは通年、ヒヨドリは冬に猛威を振るいます。みかん、びわ、キウイに群をなしてたかり、野菜の苗を引き抜き、葉を食い尽くして坊主にします。網やテグス、爆音機、かかしで対抗していますが、彼らには学習能力があり、根負けしないようにするのが精一杯です。また休憩室や作業場にある手袋等の物品を持ち去ったり、ゴミ箱をひっくり返したりと人間泣かせです。

収穫量が多いときには外部に発送したり、加工します。甘夏は5月から、キウイは12月に希望者に発送しています。加工品は切干大根、干し椎茸、お茶、ジュース、ドライフルーツ、ジャムです。お茶っぱはびわの葉、よもぎ、レモングラスです。少数の村人が責任感をもって洗浄、乾燥、裁断を行っています。冬の本当に寒いときには、大豆を選別したり、びわの葉を細かくしたり、お茶の葉をパックしたりと屋内で仕事をします。

隣の山の中にある水田ではもち米を作っています。3月初めから苗作りを始め、4月に田の水止め、耕運、代掻き、田植え、草とりとスズメ対策を経て、8月末に稲刈りです。刈り取った稲穂を束ねて竹に干し終われば、山の景色とあいまって暑い風も心地よく感じます。とれたもち米は年末の村内の餅つきに供します。

季節の観点から見ていきましょう。4月は草が伸び始め、草刈り、草とりが忙

しいです。夏野菜の植え付けや田植えもこの時期です。5月は山の新緑や山桜が美しく、甘夏の花が咲いて芳香が農園内を漂います。甘夏の収穫・発送が農園にとって大きな仕事です。甘夏を布でよく拭いてから発送します。拭きが甘いとおこられます。6、7月は雨が多く、雑草はよく伸びますが、人間がのびてしまわないように気をつけています。8月は行事と稲刈り、夏野菜の収穫、9、10月は残暑が厳しい中、冬野菜の苗作りと作付けです。大根や小松菜やねぎ類を時間の許す限り作ります。11月は秋冬野菜の収穫と、収穫感謝祭があります。12月はキウイと温州みかんの収穫で忙しいです。キウイは数年前に受粉用の蜂を導入してたくさん取れるようになりました。気温によって追熟速度が大きく変化するのが難しいところです。冬は寒くて大変な面もありますが、雑草の伸びが少なく、ホッとする時期です。大豆は隣の旧三芳村の畑に収穫に行きます。村外にでて仕事をするのもいい気分転換です。年末は農園で取れたもち米で餅つきを行い、年始からは冬野菜の収穫が本格化です。房総特産のナバナ摘みも畑で行います。また寒いこの時期には木々の剪定をしなければなりません。広大で寒冷なキウイ畑の剪定が体に堪えます。山から道にかぶさってくる樹木を伐採するのもこの時期です。2月になると雨が多くなってきます。ひな祭り用の草もちのもち草を集めるのが毎年大変なんです。なにせまだまだ寒くて小さいから。

息抜きもあります。4月は花見、8月は暑気払いと称して、散策と喫茶にいきます。季節の到来を感じながら外で甘味をいただくのがみんなうれしいのです。そして、毎月変化のある農園班ですが、毎月変わらず支給されるのが月末の労賃です。多くはないのですが、自由に使える貴重なお金です。

農園にはヤギが一頭います。平成16年3月までは牛や豚を飼っていましたが、その後は動物はいませんでした。平成24年9月からヤギ（名前：モコ）が農園の仲間入りをしました。野菜や果物くず、パンを村人たちからもらいながら、愛嬌を振りまいています。生活寮でいやなことがあっても、農園の環境とモコに愚痴を聞いてもらうことで気持ちを新たにすることができます。あまりかまうと喜びのあまり体当たりをしてくることもあるので、村人たちもすぐに身をかわせるようにと警戒を怠りません。村人の反射神経の向上に役立っています。

昨年の4月からこの村にもいのししが出るようになりました。県北からじりじりと生息範囲を南下させながら12年を経てついに安房全域が生息地帯となってしまいました。畑や田の掘り起こし、作物の食害、他の地域では人間への襲撃といった深刻な害を及ぼしています。柵を張ったり、わなを仕掛けたりと余分な手間が増えてしまいました。せめてもの抵抗として捕獲したいのししをもらってきて、わが農園で解体して、豚汁やしょうが焼きに供しています。野山を駆け回った筋肉質な動物なので、噛めば噛むほどうまみの出る肉質です。解体の詳細についてはまたの機会に。

骨折と告げし医師の掌温かく
入院のあわただしくも温かき
手術まつ医師温かく見守りぬ
温かき笑顔に痛みやわらぎぬ
リハビリの出会ひ触れ会ひ温かく
心までリハビリとなり春陽射し

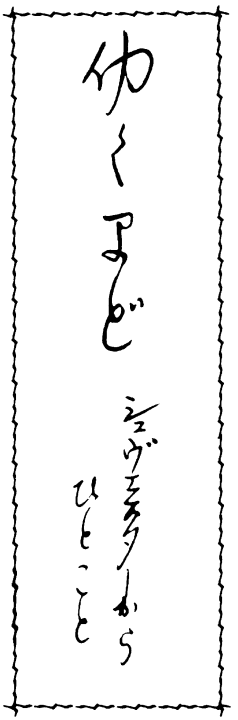
植木　道子

＊

2月4日・5日に催された、「第17回町田男女平等フェスティバル」に招かれ、4日の午後、頂いたテーマ「底点の人々と共に生きて――女性保護施設『かにた婦人の村』の精神」を、「慰安婦」問題を含めて語り、現社会が抱えている問題について共に考え、語り合いました。

町田市が2001年から毎年開かれているというご活躍もさることながら、お昼にいただいた「お父さんの軽食喫茶室」（クックマスターズ）のカレーと、三角巾にエプロン姿のお父さんたちの姿に感激しました。

天羽　道子



毎朝の食卓で楽しみなのは、庭に小鳥たちが沢山集って、パンくずを争ってたべる姿を眺めることです。

ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ツグミ、それぞれ性格の違いを観察するのが楽しみです。生きるため、たべるため、生きものたちの動きに、人間も生かされている者として感謝を覚えます。小川　都代

山下　操

やさしいヨガを中心とした体操だけのデイケアに週二回通っています。おかげで足腰も動き、買物にも行けますし、山下姉のお世話にも行けます。

この様な生活がいつまで続けられるか主の御心のままと思い、安心して毎日を感謝して過ごしています。　眞山知恵子

＊

元気にしています。時どきヘルパーさんが、外の空気を吸いに誘ってくださって車で出かけています。気候の良い日には遠出もして、かにたの近くを通ることもあり嬉しいです。　桜庭　歌子

＊

「神よ、あなたの平和のためにわたしのすべてを用いてください。」毎朝、聖フランチェコの祈りを口ずさみながら一日を始めます。年を重ねるごとに、体の不調が続き立ち止まってしまうことが多い中で、神さまがいつもわたしと一緒にいてくださるので感謝です。　細井　陽子

賛助金・クリスマス献金ありがとうございました

藤巻契司、佐藤元紀、後藤信子、関本郁子、黒川裕子、塩坂佳子、加藤美都子、大沢真理子、小金教会婦人会、入笠山讃美の家、山本美友紀、吹原当恵子、和田哲政、村田多美子、大宮洋子、加藤大、柴山操、石塚久重・八重、藤沢ベテル伝道所、聖書キリスト東京教会、深津恵太、宮田光雄、鎌倉教会、大和キリスト教会支援委員会、横田碩子、大洲幼稚園、西村多見子、井上　京子、早田奏恵、ベテスダ姉妹会、菅原てつ子、藤巻ひとみ、藤巻和司、秋津教会、石神井教会婦人会、江村政子、日本基督教団目白町教会、宮崎康久、飯久保芳子、酒井忍、深田光代、渡辺茂子、松本清文、但野明子、マリア福音姉妹会、清水正雄、東洋英和女学院小学部母の会、金子満子、菅宮建吉、埼玉新生教会女性の会、今井佳代、日本キリスト教団上富坂教会、黒田恭介、村田充子、大沼昭彦、加藤陽子、日本基督教団門司教会婦人会、山本洋子、自由学園女子部卒業生会、伊藤隆史、富山紗和子、森史子、東洋英和女学院中高部母の会、嘉陽宗信、藤巻惠子、国際基督教団代々木教会、牧内勝、坂口順治・節子、大石貞子、日本キリスト教団香里教会、日本基督教団柿ノ木坂教会、池田直子、鹿島信義、藤原千香子、神代英理、平手光明、五十嵐敏子、北島あづさ、今井直子、奥田愛子、広瀬公男、目黒サレジオ幼稚園、普連土学園宗教委員会、浅野容子、八巻紀子、村田純一郎、橋本展子、日本基督教団新津田沼教会、飯沢弘子、伊藤瑞男、日本キリスト教団甲府教会、五十嵐順子、小倉和三郎、日本基督教団信州教会、鈴木純子、田村和子、松田君子、浅野康子、学校法人彰栄学園宗教委員会、日本聾話学校、日本キリスト教団松戸教会、松田佐和子、田浦教会エレミヤ会、日本基督教団佐倉教会、聖学院小学校、一色誠太、田浦教会、日本基督教団東村山教会、日本基督教団横浜菊名教会、日本基督教団新居浜西部教会、日本基督教団ひばりが丘教会、日本基督教団水戸中央教会、日本キリスト教団西千葉教会、日本キリスト教団白鷺教会、学校法人東北学院、フェリス女学院中学校・高等学校、日本キリスト教団京都丸太町教会、学校法人稚内ひかり幼稚園、市橋みはる、佐藤千郎、日本基督教団翠ヶ丘教会、霊南坂教会、近藤浩子、日本基督教団鎌倉雪ノ下教会、学校法人頌栄女子学院、峡南幼稚園、横浜共立学園、関西学院宗教活動委員会、日本基督教団大泉教会、余郷志津子、青山学院初等部、聖園女学院高等学校中学校生徒会、日本基督教団広尾教会、敬和学園大学キリスト教育委員会、本間士郎

2月末現在　（敬称略）

おしらせ

★ 訃報

秋元寛子姉（天羽道子の祈りの友）が2017年1月27日に召天されました。享年百歳でした。

奉仕女・山下操姉が2月14日に召天されました。90歳にあと少しでした。21日の大泉ベテル教会でのお別れ会には、妹さんも見えてくださいました。

長い間のお支えとお交わりを心から感謝し、ご家族・関係者の方々の上に天父の深い慰めと平安をお祈りいたします。

★ 評議員会・理事会の議事内容

第209回理事会　1月7日（土）
於いずみ寮ふかつはうす。いずみ寮北側塀工事入札実施の議案が承認議決された。

第210回理事会　2月4日（土）
於いずみ寮ふかつはうす。いずみ寮北側塀工事にともなう入札結果と落札業者決定の件が承認議決された。

第10回評議員会　2月18日（土）
於いずみ寮。28年度補正予算を審議承認議決した。

第211回理事会　同日
評議員会で承認された28年度補正予算案を承認議決した。

今後の日程

3月11日（土）　第11回評議員会と第212回理事会　於いずみ寮
29年度事業計画と資金収支予算案の審議予定

★ ホームページの充実

昨年10月から、今までのホームページの情報公開（定款、決算報告等）面を充実させました。

ディアコニア誌につきましても発行ごとに新しく掲載してまいります。「かにた告知板」、「大泉ベテル教会」、「ドイツ・ベテスダ本部」等のページも、どうぞ開いてご覧ください。

★ 献金のお願い

皆様には日々の祈りの中でベテスダのことを覚えてくださり、あわせて経済的ご支援を頂戴いたしまして、衷心より感謝申し上げます。今後とも、宜しくお願いいたします。

振替口座00192-2-138164
口座名　ベテスダ奉仕女母の家

★ 編集後記

2016年度末を迎え、あらためて皆様のご支援に感謝いたします。おかげさまで事業計画も粛々と遂行されております。引き続きのご支援、よろしくお願いいたします。

（佐藤　元紀）

2017年3月15日発行
発行人　大沼　昭彦
編集責任者　佐藤　元紀
印刷所　㈱印刷センター
発行所（年3回発行）
〒178-0061
東京都練馬区大泉学園町7-17-30
社会福祉法人 ベテスダ奉仕女母の家
http://www.bethesda-dmh.org/